

「いんなん」 しています。

わだいのついで

耕作放棄地

調査の途中で見事なほざかけに出合いました。十津川村の山深い溪谷に突然現れた美しい姿でした。農家の人の丹精込めた仕事がかんな山奥で生きていたのでした。

しかし、最近よく見るのは、耕作されずに草がぼうぼうに生えてしまっている田畑の姿です。

「耕作放棄地」の本来の意味は、もう耕作する考えがない、という農家の自主申告に基づいた行政用語で、農家の意思を表していません。客観的に見て、「草刈りなどすればまだ耕作で

きるな」という土地も耕作放棄地であり、中にはすでに森林のように戻すのが困難な土地もあります。

耕作放棄地は全国で増え続け、今や、日本の農地面積のおよそ1割。しかもその半数が再生不能と判断されています。日本の農地は、昭和30年代以降、工場用地や道路、宅地開発のために減っていきましたが、現在の耕作放棄の最大の理由は高齢化と後継者不足です。高度経済成長期に子どもを都会に出し、その間田畑を守ってきた多くの親たちは、30年、40年の時を経てすっかり高齢となり農業

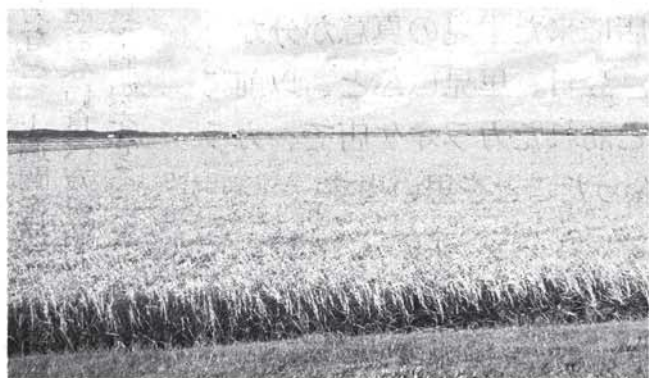
を続けることが困難になってきたのです。農作物の価格の低迷も意欲の喪失に拍車をかけているようです。

電気のとちと未来

を続けることが困難になってきたのです。農作物の価格の低迷も意欲の喪失に拍車をかけているようです。

発電畑のジレンマ

農業と農地の維持をどうするか、そんな農家の悩みに一種の朗報をもたらしたのが、ソーラー(太陽光)発電でした。2011年の福島第一原発事故以後、自



一面の稲穂

然エネルギーへの関心が高まり、太陽光発電の導入が国内で一気に進みました。再生可能エネルギーの固定価格買取制度(発電した電気を電力会社が一定の価格で買い取ってくれる)が追い風になったこともあり、制度発足からわずか1年半で原発6基分にも相当する太陽光発電設備が全国に完成したとの報告もあり、太陽光発電はブームの

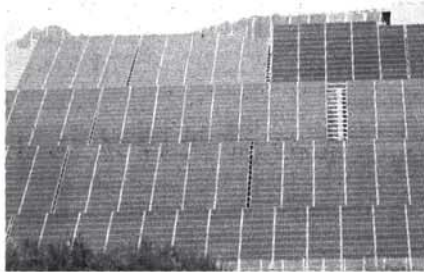
陽光バブルとも言われまじりました。大規模なメガソーラーだけではなく、各地の農家、農地レベルでも太陽光発電の導入が急激に進んだのです。和歌山県でも太陽光発電導入のための農地転用が盛んに行われました。高齢のため農業維持が難しく後継者もない農家にとって、10、20年は売

元に入ってくるため、老後の安心のために転用したとの理由もありました。現在青々と耕されている優良農地の発電地への転用も見られました。日当たりの良い米づくりの適地は太陽光発電の適地でもあるのです。

一方、牧歌的な農村風景に太陽光パネルは似合わないという意見や環境への影響を不安視する声もあります。太陽光発電はブームのように増えていますが、優良な農地を転用してソーラーパネルを導入し「電気畑」にしてしまうことは農業生産の維持や生産地保護、公益機能の喪失の面からも心配されます。

太陽や水など自然資源を活用したエネルギーへの転換は、環境面からも自給電力を確保する点でもこれからの大切な方向性です。しかし、たとえ法律の範囲内の設置であっても、農地の農業の公益機能や農業生産への影響を無視したまま増

一面の太陽光発電



え続けるとしたら、いずれ大きな社会問題が起きるでしょう。

耕作放棄地への有効な対策が進まず、農業の維持も追い込まれた状況の中で、生き延びるための方法の一つが太陽光発電でした。多くのジレンマを抱え模索しながらも当事者たちの選択肢の中で冒険的に新しい扉を開いたのが現在の状況です。今はコトの是非は不明です。しかし、農業と農村にとってまったく新しい一歩が始まっている、とさえ

えま

湯崎真梨子(ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。



プロ
フィル